

# 日本産業衛生学会 近畿地方会ニュース

発行所 日本産業衛生学会近畿地方会事務局  
(事務局 藤木幸雄)  
〒571 大阪府門真市殿島町7番6号  
松下産業衛生科学センター内  
FAX 06-902-2019  
発行責任者(地方会長) 堀口俊一

## 第37回 近畿産業衛生学会

主催 日本産業衛生学会近畿地方会

学会長 住野 公昭(神戸大学医学部公衆衛生学教室)

日 時 1997年11月15日(土) 9:30~17:00  
会 場 神戸大学医学部附属病院内 第4講堂 (第1会場)  
第5講堂 (第2会場)  
大学生協食堂(懇親会場)

特別講演 13:30~14:20(第2会場)  
「病理学からみた石綿肺症」  
伊東 宏(神戸大学医学部病理学教授)  
座長 小泉 直子(兵庫医科大学公衆衛生学)

シンポジウム 14:30~17:00(第2会場)  
「法改正にともなう産業スタッフの権限強化と責務」  
シンポジスト

- 1 坂本 栄生(兵庫労働基準局)
- 2 郷司 純子(三菱重工業(株)神戸造船所)
- 3 矢野 武(神戸市医師会)
- 4 長澤 孝子(積水化学工業(株)栗東工場)
- 5 徳永 力雄(関西医科大学衛生学)

座長 住野 公昭(神戸大学医学部公衆衛生学)

評議員会 12:30~13:10 (医学部基礎学舎内会議室)  
懇親会 17:10~ (大学生協食堂)

### 学会開催に当たって

神戸大学医学部公衆衛生学教室

住野 公昭

このたび第37回近畿産業衛生学会を本医学部で開催することになりました。大震災から2年9か月、見た目の復興は着々と進んでおりますが、地域・住民によっては先がみえない状況が続いていて、それらを見るにつけ、聞くにつけ未だ胸がいたくなるのは震災後遺症でしょうか。

午前的一般発表は例年どおり2会場で行ないます。活発な討議をお願いいたします。午後は「病理学からみた石綿肺症」と題する特別講演と「法改正にともなう産業保健スタッフの権限強化と責務」というテーマでシンポジウムを開きます。

特別講演の石綿肺は、震災後の解体作業にともなう大気汚染でも騒がれましたが、病理専門家から見るとそれほどめずらしいものでないという。本学病理学第一講座の伊東教授の講演は、日頃話にも聞けども例知らずである我々の、よい勉強の機会になると期待しています。

シンポジウムは、平成8年10月に改正された労働安全衛生法施行後1年経過した時点で、この改正が現場ではどのように捉えられまた変化したかを各立場から報告していただくように企画しました。昨年の第6回産業医・産業看護全国協議会(於鳥取)でも、改正をめぐるのシンポジウムがもたれました。今回は、産業スタッフの役割が強化された部分とそれにとともなう責務が実際に変わったのか、それほど変わっていないとすれば今後どう対処するか等について、忌憚のない発表と意見交換を行ないたいと思います。

学会終了後ただちに(予定では午後5時)懇親会を開く段取りにしております。午後6時半には終了して、JR神戸駅南側にありますハーバーランドを散策いただき復興ぶりの一部をまのあたりにするなど、晩秋の一日を有意義にお過ごしいたきますよう、お願いいたします。ご挨拶といたします。

## 第37回 近畿産業衛生学会プログラム

## 第1会場(第4講堂)(9:30~12:04)

- 9:30~10:25 座長 織田 行雄(大阪医大・衛生公衆衛生)
- 101 尿の濃淡の補正に関する検討(第1報)  
-尿比重とクレアチニンの関係-  
○村田和弘 廣瀬隆穂 木村真次(近畿健康管理センター)
- 102 尿の濃淡の補正に関する検討(第2報)  
-尿中水銀-  
○廣瀬隆穂 村田和弘 木村真次(近畿健康管理センター)
- 103 生体試料中のホウ素濃度分析法の国際比較 ICP 発光分析法の有用性について  
○臼田 寛 河野公一 織田行雄 渡辺美鈴 土手友太郎 高橋由香 西浦公朗 宮田香織 西浦啓之(大阪医大・衛生公衆衛生)
- 104 弗化物経静脈投与による生体への影響  
○土手友太郎 河野公一 臼田 寛 炭 美子 後藤英太 齊藤昌久 田川輝章(大阪医大・衛生公衆衛生)
- 105 当社におけるフッ化水素酸火傷の実態  
○木村 隆 木村真次(NEC 関西)
- 10:25~11:20 座長 圓藤陽子(関西医大・公衆衛生)
- 106 クロロホルム曝露マウスにおける特異的mRNAの発現  
○都築大祐 安保克己 李 明鎮 西尾久英 住野公昭(神戸大・医・公衆衛生)
- 107 シクロヘキサノン曝露と尿中代謝物シクロヘキサノールの関係  
○岡田洋子<sup>1)</sup> 河合俊夫<sup>1)</sup> 光吉宏司<sup>1)</sup> 堀口俊一<sup>1)</sup> 池田正之<sup>2)</sup>(<sup>1)</sup>中災防・大阪センター <sup>2)</sup>京都工場保健会)
- 108 ジクロロメタンの曝露指標としての尿中ジクロロメタン  
○鶴飼博彦<sup>1)</sup> 岡本浩<sup>1)</sup> 高田志郎<sup>1)</sup> 乾 修然<sup>1)</sup> 河合俊夫<sup>2)</sup> 池田正之<sup>1)</sup>(<sup>1)</sup>京都工場保健会 <sup>2)</sup>中災防・大阪センター)
- 109 漆器産業における作業者の曝露濃度と生物学的モニタリング  
○河合俊夫<sup>1)2)</sup> 中原洋子<sup>1)</sup> 光吉宏司<sup>1)</sup> 西條清史<sup>2)</sup> 堀口俊一<sup>1)</sup>(<sup>1)</sup>中災防・大阪センター <sup>2)</sup>金沢大・医・衛生)
- 110 有機溶剤作業用チェックリストを用いた評価について  
○森岡郁晴<sup>1)</sup> 宮井信行<sup>1)</sup> 宮下和久<sup>1)</sup> 河合俊夫<sup>2)</sup> 武田真太郎<sup>3)</sup> 堀口俊一<sup>2)</sup>(<sup>1)</sup>和歌山医大・衛生 <sup>2)</sup>中災防・大阪センター <sup>3)</sup>和歌山医大・看護短大部)
- 11:20~12:04 座長 河合俊夫(中災防・大阪センター)
- 111 アノディック・ストリッピング・ボルタンメトリー法とフレイムレス原子吸光法の比較 -血中鉛量の分析-  
○光吉宏司 河合俊夫 堀口俊一(中災防・大阪センター)
- 112 鉛取扱い作業における加速度脈波の測定  
○相羽洋子<sup>1)</sup> 大柴 聡<sup>1)</sup> 清田郁子<sup>2)</sup> 圓藤吟史<sup>2)</sup> 森岡郁晴<sup>3)</sup> 宮下和久<sup>3)</sup> 堀口俊一<sup>1)</sup>(<sup>1)</sup>中災防・大阪センター <sup>2)</sup>大阪市大・医・環境衛生 <sup>3)</sup>和歌山医大・衛生)
- 113 冷えを訴える女子VDT作業者のサーモグラフィ負荷テスト  
○郷司純子(三菱重工・神戸造船所)
- 114 振動健診結果の16年間の推移  
○大柴 聡<sup>1)</sup> 相羽洋子<sup>1)</sup> 森岡郁晴<sup>2)</sup> 宮下和久<sup>2)</sup> 堀口俊一<sup>1)</sup>(<sup>1)</sup>中災防・大阪センター <sup>2)</sup>和歌山医大・衛生)

## 第2会場(第5講堂)(9:30~12:15)

- 9:30~10:25 座長 小泉直子(兵庫医大・公衆衛生)
- 201 データマイニングの手法を用いた健診データの解析  
○加藤俊夫<sup>1)</sup> 神 幹雄<sup>1)</sup> 田口恵一<sup>1)</sup> 奥田武正<sup>1)</sup> 小谷隆子<sup>1)</sup> 辻有紀子<sup>1)</sup> 和田信義<sup>2)</sup>(<sup>1)</sup>三菱電機系統変電・交通システム事業所健康増進センター <sup>2)</sup>三菱電機情報技術総合研究所)
- 202 健診とプライマリ・ケア(その4)  
-各種症例の再検討-  
○中野碩夫<sup>1)</sup> 中野昭子<sup>1)</sup> 圓藤吟史<sup>2)</sup>(<sup>1)</sup>m・oクリニック <sup>2)</sup>大阪市大・医・環境衛生)
- 203 健診にみられた耐糖能異常の背景因子に関する検討  
○瀧本忠司 宮崎 淨 高山純一  
(NTT大阪中央健康管理所)
- 204 社内従業員健診におけるがん発見率の向上について  
○國井立志(新キャタピラー三菱・明石健康管理室)
- 205 大腸腫瘍患者の職場復帰について  
○鍵谷俊文 前田宏明  
(全日本空輸大阪健康管理センター)
- 10:25~11:09 座長 山田誠二(松下産業衛生科学センター)
- 206 労働時間が労働者の健康に及ぼす影響  
○山本博一 森岡郁晴 ゲオブランチュー・オラワン 万居宣子 富田耕太郎 宮井信行 宮下和久(和歌山医大・衛生)
- 207 女性運転手の労働実態と健康状態  
○北原照代 埴田和史 西山勝夫 立入理恵子(滋賀医大・予防医学)
- 208 震災復興建設企業労働者のSDSによる2年間の観察  
○二宮ルリ子<sup>1)</sup> 小泉直子<sup>1)</sup> 師富三千江<sup>1)</sup> 藤田大輔<sup>2)</sup>(<sup>1)</sup>兵庫医大・公衆衛生 <sup>2)</sup>神戸大・発達科学部)
- 209 耳栓の装着方法による遮音効果の違いについて  
○本田朋子 中村俊子 藤木幸雄  
(松下産業衛生科学センター)
- 11:09~11:53 座長 岡田邦夫(大阪ガスKK)
- 210 企業内労働衛生教育活動について  
○南 勉 松元麻子 山田誠二  
(松下産業衛生科学センター)
- 211 継続保健指導による生活習慣変容の検討について  
○竹岡和子 奥田貴子 上田美代子 糸井重行  
(近畿健康管理センター)
- 212 肥満者および糖尿病に対する3ヶ月間の企業内栄養教育の効果について  
○伊藤克之 志辺 好 太田千佳代 中村吉成 葦川明義 岩根幹能 茂原 治(和歌山健康センター)
- 213 某電気メーカーにおける労働者の運動習慣について  
○村上彰善 豊田直子 日馬久美子 千田恭子 宮上浩史 山田誠二 藤木幸雄(松下産業衛生科学センター)
- 11:53~12:15 座長 西尾久英(神戸大・医・公衆衛生)
- 214 問題飲酒行動を決定する遺伝・環境要因  
○竹下達也 丸山総一郎 森本兼囊(大阪大・医・環境医学)
- 215 長期喫煙者にみられる白血球増多症について  
○平野 拓(済生会吹田特養高寿園)



## 第15回 アジア労働衛生学会 (クアラルンプール) 印象記

池田 正之 (京都工場保健会)

この8月31日から9月3日までマレーシアのクアラルンプールで上記の学会が開催されました。この学会は3年に1回アジアの各地を巡って開催されています。私は約2年前にクアラルンプール市一般住民を対象とした鉛・カドミウム曝露調査を国立マレーシア大学の人達と共同研究したことがあったので、その時の成績をこの学会で発表するために出席しました。あわせて有機溶剤関係の発表を重点的に聞こうと思っていたのですが、会場でJ. Occup. Health 編集長の佐藤章夫先生 (山梨医大) から「良い発表があったら雑誌に載せたいから知らせてほしい」と言われて結果的にはいろんな発表をきくことになりました。

御存知の方が多いと思いますがマレーシアは回教を国教としていて、人口の約半数を占めるマレー系の人々は殆どが回教徒です。学会場にもヘッド・スカーフを被った女の人達の姿が目立ちました。学会長の Dr. Singh は名前から言ってインド系、開会講演をした厚生大臣は多分中国系、そして我が共同研究者 Dr. Noor Hassim はマレー系といった具合に三者混然一体となっています。因みにマハティール首相はお父さんがインド系回教徒、お母さんはマレー系の人なのだそうです。

学会は総会講演と3会場およびポスター会場に分かれての発表の2つの形式で行われました。総会講演では小木和孝先生の講演を含めて二・三興味深い発表がありました。どちらかと言えば英語の教科書を聞いている感じのものも少なからずありました。

一般発表 (ミニ・シンポジウムを含めて) で面白いと思ったものを少し紹介します。溶剤関係ではマレーシアの Institute of Medical Research の人達が溶剤作業員154名を対象に WHO の NCTB その他の神経行動学テストを行った結果を報告していました。このグループでは溶剤ごとの TWA 曝露濃度なども測定しており (解析はまだの由です) 結果が期待されます。同じ研究所の人は鉛蓄電池作業員141名に対しても同様の研究を進め、血中鉛が  $40 \mu\text{g}/100\text{ml}$  で Digit Symbol スコアが変化することを発表していました。別の発表によればマレーシアでは最近労働衛生関係の法規の整備が進み、鉛作業環境の改善が行われた結果、最近の調査では男子鉛蓄電池作業員405名の血中鉛の平均値 (算術平均?) は  $43.3 \mu\text{g}/100\text{ml}$  であり、この値は過去に比べて明らかな低下を示している由です。中国からの Dr. G. Pan らは製鉄所のコークス炉作業員を対象に尿中 1-ヒドロキシプロリン、DNA 付加体、血清 p53 蛋白、代謝酵素の多形性など各種指標を用いた立体的な調査 (これは日本の労研との共同研究の由) の結果を発表しました。また韓



国の東亜大学の Dr. Kim からは男子溶接工にみられた典型的なマンガン中毒 (パーキンソニズム) の症例報告がありました。さらにタイ国の Dr. Sri-akajunt 他からは天然ゴムによるアレルギー感作の発生率がゴム園作業員では少なく、手袋を作る段階で高まる (ゴム加工段階で、しかし天然ゴムから発生する蛋白-latex protein が原因物質だと演者は考えています) 旨の発表がありました。演者は英国の研究室にいて研究資料と一緒に母国に一時帰国して調査を行った由です。これらはかなり高いレベルの研究だと思いました。

非常に興味があったのは日本風と言えば労働省本省の職員の人達からIC産業や電器産業を対象にした調査の結果が報告されたことです。報告自体もマレーシアのIC産業の現状の一端がうかがわれて興味深い内容でしたが、それ以上に行政官と学会とが密接な関係を維持していることを推察される点に興味を持ちました。

これら以外にも抄録からはおそらく面白いと思われる演題がありましたが、演者の欠席で発表がなく、具体的な内容がわからずに終わったことは残念なことでした。

たまたま昼食で隣合った人が学会事務局の人で、この人から出席状況を教えてもらうことが出来ました。マレーシアから140~150人ほど、外国からもほぼ同じ人数、そして当日登録が50名位、外国からの40%強が日本からだということで、実際演題を数えても大略1/3くらいは日本からの演題でした。日本の研究者の貢献が随分大きかったこととなります。反面シンガポールからの登録が少なく、タイ (通貨問題の煽り?) と中国の演題の取消しが多かったことも気になりました。

次回は3年後にフィリピン (マニラかそれともセブになるか未定) で開催される予定です。

## 報 告

第3回職業関連性筋骨格系障害研究会  
第42回日本産業衛生学会頸肩腕障害研究会

## 「上肢作業に基づく疾病の認定基準について」

車谷典男 (奈良医大公衆衛生学)

去る8月9日 (土) 同志社大学京都今出川キャンパスにて、70余名の参加者を得て、本年2月に発出された「上肢作業に基づく疾病の認定上外の認定基準について」(基発第65号通達)、熱心な討論が交わされた。この22年ぶりの改定になる今回の認定基準の「新しさ」と「問題点」とが、研究会が依頼した6名の演者と2名の一般演者によって提起された。

午前中、最初に井谷 (名市大衛生) が、基調として新認定基準の背景、文言の個々の意味合いなどについて広汎かつ詳細な報告をした。その中で、認定基準で用いられている上肢障害という新しい言葉は、上肢作業が要因となって発生した上肢の筋骨格系障害を意味しており、作業関連性が明示されていることや、対象作業が拡大されていること等に一定の評価を与えた。佐藤 (京都法律事務所・弁護士) は、民事訴訟に持ち込まれた業務外認定事例の経験から、旧認定基準の問題と、裁判所における業務外上の判断は、認定基準作成の元になった専門家会議などの報告書や最新の医学的知見は参考にされるが、いわゆる認定基準には拘束されないことを、最高裁判所事務総局行政局の協議資料 (1995年12月) を引用しながら示した。

午後は、午前中の総論的な話を受け、患者を診察している立場からの報告を受けた。宇土 (広大公衛) は拡大されたという対象作業のリストがなお不十分であること、新認定基準では頸

肩腕症候群の占める割合が少数であるかの記述になっているが、臨床現場ではむしろよく見られることを自験例から指摘した。中田(淀協社医研)は、長期治療症例を提示しながら、適切な治療と作業負担の軽減により、徐々にあるが頸肩腕障害の軽快が見られることを示し、新認定基準で前提条件つきながら述べられている一般に「3か月程度」で治癒との記述に疑問を投げかけた。広瀬(仙台錦町診療所産業医学センター)は、業務加重性の判断等に「前進」点はみられるが、やはり自験例をもとに新認定基準における治癒期間や発症までの期間等の考え方に異論を呈した。三宅(京都市城南診療所)も同じく「治癒期間」について強い批判を加えた。一般演題で高田(東京社医研センター)は、これまでの認定基準を概括するとともに、「適切な療養・健康管理」が行われなかった場合には、「3か月」を超えて「認定」という事務連絡45号が、新認定基準の発出によって削除されたことに懸念を示し、古谷(全国労働安全センター)は、海外でも上肢障害が社会的に大きな問題となっていることをインターネット上で収集した情報により示すとともに、作業関連性を前提とした疾病概念として産業医学領域で汎用されてきた頸肩腕障害という呼称こそ、新認定基準で使用されるべきではなかったかとの意見を述べた。

今回のテーマは、頸肩腕障害研究会として新認定基準に対する見解をまとめるための一環としても設定されたものである。「見解」のたたき台を作成するために、ワーキング・グループ的なものを設置することが、研究会の最後に討論を踏まえ、代表世話人である小野(名大・衛生)から提案された。

(文中敬称略)

## 第2回近畿産業医・産業看護協議会に参加して 岡田治子(ダイハツ健保・保健婦)

「効果的な健康教育のすすめ方」をテーマに、平成9年9月4日(木)13:00~17:00医師会館にて開催された。内容構成は2つ。1)「健康教育の理論と実際—特に企画と評価を中心として—」と題した實成文彦教授(香川医大)の特別講演では健康教育の基本を体系的に整理された講義で大変参考になった。①健康教育のねらいは、知識の普及や理解を深め、究極的には適切な動機づけによって態度を変容させ、健康的な行動を実践させる事である。②進め方は企画では集団で解決すべき

問題を明確化し教育の目的と具体的な目標設定と対象を決定、適切な方法と媒体を選択し、教育内容を決定して実施の後、評価が必要で、必要に応じて企画—実施—評価を繰り返し、より高い目標へ近づくと基本的な部分をまとめられた。産業保健の現状では健康づくりや作業関連疾患の予防が主な課題で、環境の改善・整備も不可欠で、健康教育は対象者と共に、対象を取り巻く環境に対する教育も必要で、色々な段階での評価をフィードバックする事が大切だと結ばれた。

2)「効果的な健康教育のすすめ方」と題したシンポジウムでは各20分の発表で兼高産業医は「バイタルエイジに応じた健康教育」は内容が難解であった。玉木保健婦は「セルフケアをどう支援するか」面接のすすめ方中心の話題提供。藤田人事部次長は「企業における人材育成—社内研修と健康教育」事業者としての立場で考え方や現状が紹介された。能見トレーナーは「一事業場における健康教育の現状」は阪神淡路大震災を契機に進められた現状紹介。指定発言として藤堂トレーナーから「企業外労働衛生機関における健康教育のすすめ方」と題して現状と問題・課題が話題提供された。10分の休憩の後、活発な質問と質疑応答の形でディスカッションされた。

## 第2回 研究室見学会

(大阪市立大学医学部・環境衛生学教室)

安保克己 都築大裕(神戸大・公衆衛生学)

最初に、大阪市医学会における大学院の先生の学位申請論文報告を教室の隣りの講堂で拝聴しました。二人の先生がヒ素の代謝と毒性に関する論文要旨を報告されました。その後教室に戻り、お菓子をいただきました。次に、教室内を見学させていただきました。ヒ素の研究の他、農業の研究や循環器疾患の疫学もされており、特にミジンコの繁殖を用いた農薬毒性の研究は日本ではめずらしいようです。次に隣りの新しい建物の一室に移ってセミナーが行われました。まず今回参加者の名簿と教室員名簿が配布されましたが、会員交流の一助になると思いますので今後も是非続けてほしいと思います。参加者全員の自己紹介の後、発表と質疑応答がありました。その後まだ時間があるとのことで、図書館を見学させていただきました。そしてお待ちかねの懇親会ですが、都合により参加できず、残念そうにされた園藤教授のお顔が忘れられません。

**KKCは全国ネットの健康管理パートナーです!**

～健診・検査から保健指導まで総合健康管理機関として、地域を越えたサービスが可能です～

全国ネットの健診サービスを提供—

多彩なメニューで応援—

信頼と安心の精度—

KKCオリジナル健康管理システム—

Window's対応健診結果検索支援ソフト「ADVICE」  
健診契約先に無償提供中!



基本ソフト:Windows95または3.1

労働大臣許可 労働者健康保持増進サービス機関

**KKC 財団法人近畿健康管理センター**

■法賀事業部 0775-25-3181  
■彦根事務所 0749-22-8089  
■京都事務所 075-662-7692  
■ウェルネス倶楽部 0748-32-8700  
■大阪事業部 06-304-1532  
■兵庫事業部 078-303-1355  
■明石事務所 078-917-6774  
■三重事業部 059-225-7426  
■名古屋事務所 052-735-0821  
■東京事業部 03-3242-5290  
■事務局 0775-25-3233  
■公益事業推進部 0775-25-7744

—KKCホームページ開設—

<http://hirunet.ncs.co.jp/~kkc/zai-kke@mx2.nisq.net>

## 故植西忠信先生を追想して



京都帝国大学医学部卒業（昭和13年）  
医学博士 労働衛生コンサルタント  
専門医制度の指導医登録  
（財）近畿健康管理センター会長  
日本産業衛生学会名誉会員

## 植西忠信先生を追想して

故植西忠信先生 山中 孟（滋賀県医師会会長）  
植西先生が亡くなられてから早や1年近くになってまいりました。

先生は滋賀県の産業保健分野において、学術的な面からも実地活動的な面からも、卓越した指導者でありました。先生が東レ（株）瀬田診療所長としてご在職中の昭和46年、滋賀県医師会の産業保健に関心を持つ有志が「滋賀県産業医会」を設立するに当たり、初代会長に就任して頂いた時から、私は公私ともに大変お世話になってきました。先生の熱心なご指導と剛柔合わせ持たれたご人格により、滋賀県産業医会は会員の和も良く、全国に先駆けた存在として活動を展開しつつ今日に至っています。

地域の健康管理機関（総合健診機関）は公益法人組織であるべきだという理念から、昭和48年に（財）近畿健康管理センターが設立されました。とある奇縁があって私がこの財団の会長に就任いたしました。産業保健の重要性が高まるとともに事業はその専門性も深くなり、需要も拡大してきます。昭和57年私が県医師会の役職に就いたのを機に、当時同センターの労働衛生研

究所長に就任していただいていた植西先生に、第二代会長をお引き受け頂きました。先生は文字通りその道の専門家でおられ、以後同センターの発展だけでなく、産業保健を中心とした広い地域保健全般の発展に大きく貢献されました。

また先生は広く知られている通り、一流の文筆家でありました。自らお書きになった原稿量は膨大なものであったと述懐しておられます。「赤と緑の記録」、「産業医三十五年」「産業医ノート」「産業医ノート第二版」「万物は流転する」等の著書を頂きました。それらの内容は、先生の幼少時代から学生時代の思い出、従軍記録、折々のエッセイ、ご専門の産業保健に関する研究報告や後輩への指導書等であります。先生の学問的な情熱、保健活動への執念、人間関係を大切にされる姿、豊かな情緒から発信される社会時評等が、それぞれの著書に溢れています。特に「産業医ノート」の初版と第二版は、滋賀県医師会の切なる要望に応じてお書き頂いたものであります。滋賀県医師会員の産業医研修の分かりやすいテキストとして、産業医である会員も、またこれから産業医を目指す会員も、広く活用させていただいています。

先生が医師会活動に参加されるようになったのは、臨床活動を離れてからでしたが、医師会の医学会・研修会に積極的に出席され発言されました。また大津市医師会の会員日帰り旅行（先輩と語る会）や滋賀県医師会の「健勝の集い」等にもよく参加され、酒を嗜みつつ静かな口調で楽しんでおられた姿が印象的でした。

今は亡き植西先生に心からの敬愛と感謝の念を捧げます。

## お知らせ

## 第46回近畿地方会総会（第一報）

開催日時：平成10年5月22日（金）  
場 所：大阪市立大学医学部 医療研修センター  
「あべのメディクス」講堂

## 第8回産業医・産業看護全国協議会（第一報）

日 時：平成10年10月6日（火）  
会 場：大阪国際交流センター  
テーマ：環境と健康 -新しい世紀をみすえて-  
企画運営委員長 阪上皖庸  
企画運営副委員長 植本寿満枝  
事務局 松下健康管理センター 佐野 敦

## 第4回研究室見学会

場 所：神戸大学医学部・公衆衛生学教室（基礎学舎南棟5階）  
日 時：12月11日（木）午後2：00～  
内 容：1）教室紹介 2）研究紹介 3）ビール会  
連絡先：TEL(078)341-7451 内線3322 住野 公昭  
準備の都合上、参加ご希望の方は事前に各担当校連絡先にお申込み下さい。

## 第49回産業疲労研究会

日 時：1997年11月22日（土）9：30～17：00  
場 所：京都工場保健会（宮木記念ホール）  
演題申込先 天理大学 体育学部 近藤研究室  
〒632 奈良県天理市田井庄町80 ☎0743-62-3076  
fax 0743-62-6295 Eメール EZH02425@niftyserve.or.jp  
産業疲労研究会ホームページもご覧下さい。  
アドレス <http://square.umin.ac.jp/of/>

## 議 事 録

- 日 時：平成9年7月22日（火）16：00～18：00  
場 所：大阪市立大学医学部 医療研修センター  
「あべのメディクス」8階 第二会議室  
出 席：堀口、藤木、池田、徳永、小泉、上田、河合、宮上、岡田、山下、樹屋（代理：阿部）、宮下（代理：森岡）住野（今年度学会長）  
欠 席：園藤、中嶋、埴田、中村  
事務局：南、大原
- 次号（33号）地方会ニュースに故植西先生の追悼文を掲載する。  
追悼文は滋賀県医師会会長の山中先生に依頼済みとの報告が上田幹事よりあった。
  - 第8回産業医・産業看護部会全国協議会の開催について詳細については現在検討中である。会期は1日とし国際交流会館で開催予定である。との説明が上田幹事と岡田幹事より説明があった。
  - 50回記念事業について  
まだ時間があるので、良い案を出して頂きたい。継続検討
  - 第38回近畿産業衛生学会  
滋賀県での開催  
学会長 上島弘嗣先生（滋賀医大福祉保健医学講座）

## 編 集 後 記

地方学会が神戸で開催されます。学会に参加し、大震災から立ち直りつつある姿を確かめるとともに、なお立ち直れないでいる人達に思いを馳せたいと考えています。

（埴田）